

開催地名	島根県 松江市
開催日時	令和6年10月8日(火)11:00～12:30
開催場所	松江市立鹿島中学校
語り部	宮本 英一(千葉県旭市)
参加者	松江市民(鹿島地区住民) 120名(当該地区の自主防災隊、中学校生徒、教員、保護者) 松江市役所職員 9名
開催経緯	本市では過去にも、津波による被害(津波災害警戒区域)が予想される地域の小学校・中学校について、平成30年度、令和元年度に同プロジェクトの前身である「災害伝承10年プロジェクト」を開催した。今年度開催分についても、過去開催と同様に実際に津波による被害を体験した方の講話を聴講する機会を設け、地域の防災力向上へとつなげるために実施した。
内容	■ はじめに 旭市は、漁業や醤油の生産で知られる銚子市の隣に位置し、人口約6万2千人のまちである。平成17年に旧・旭市と飯岡町、海上町、干潟町が合併し、現在の旭市が誕生した。講演者は合併前の飯岡町職員として勤務し、合併後は旭市役所に奉職した。その後、防災の重要性を広めるため、旭市防災資料館において震災体験を語る活動を行っている。 ■ 旭市の津波被害 東日本大震災において、旭市では災害関連死1名を含む14名が死亡し、行方不明者2名はいまだに発見されていない。津波は海岸から200～300メートルの範囲に達したものの、市全体が被害を受けたわけではなかった。 津波は3回にわたって襲来し、最初の津波は地震発生から1時間後に高さ4.5メートルで到達した。続く第2波はその30分後で高さ2～3メートル、そして第3波はさらに1時間後に押し寄せ、高さ7.6メートルに達した。 犠牲者の多くは第1波の後に避難したが、安心して自宅に戻った際に第3波に流されてしまった。また、堤防を超える津波は来ないと考え、避難しなかった人もいたことが被害を拡大させた要因の一つであった。 ■ 私と家族が体験した津波 地震発生後、講演者は避難せずに海の様子を見ていた。これまでも津波警報や注意報が発令されることはあったが、潮位の変化は10～20センチ程度であったため、九十九里浜のような砂浜地形では大津波は来ないと考えていた。 最初の津波は自宅前の堤防を超えなかったため安心し、避難所から戻ってきた住民とともに道路の清掃を始めた。余震が続き、津波警報も発令されていたが、特に避難することもなく作業を続けていた。 清掃作業を終えた後、近隣住民とともに海を眺めていると、潮が大きく引いていることに気付いた。その直後、「大きな津波が来るぞ!」と走ってくる人の叫び声が響いた。防災無線からも「大津波警報、緊急避難、緊急避難、団長命令」との放送が流れた。 講演者が急いで自宅へ戻った直後、「バリバリ」と音がすると同時に津波が襲来し、瞬く間に流された。口の中に海水が入り、必死に泳ぎながら壊れた屋根にしがみついて何とか助かった。妻は屋根に乗ることができず水の中にいたが、運よく助かることができた。当時86歳だった母親は、近所の人に助けられた。 その10時間後、船橋市から駆けつけた息子の車で母の実家に避難し、寒さに震えながら一夜を過ごしたことが今でも記憶に残っている。 ■ 区長としての仕事 津波によって海岸沿いの道路は大きく損壊し、講演者の自宅も窓ガラスが割れ、畳が持ち上がるなど足の踏み場もない状態であった。どこから片付ければよいか分からず、途方に暮れる状況であった。 しかし、区長としての責務を果たすため、自宅の片付けと並行して地域住民の支援にも奔走した。町内は90軒ほどの小規模な地域であったが、被災の有無によって状況が大きく分かれた。「ごみを出してもよいか」「床下の泥をかき出すため市に連絡してほしい」といった相談が寄せ

	られる一方で、「家の解体に関する行政手続きはどうか」「解体業者を紹介してほしい」といった要望も多く、講演者はその都度、市役所と連絡を取り、住民の支援に努めた。ボランティアセンターには多くの人々が集まり支援活動が行われたが、作業現場までの移動や安全確認に時間がかかり、実際の作業時間が限られてしまうもどかしさがあった。そんな中、「いつも海にお世話になっているので」と東京から駆けつけたサーファーたちが片付けを手伝ってくれたことは、非常に嬉しく、励みになった。 ■ 避難所の様子 旭市では震災発生後、市内に10カ所の避難所が開設され、2,863人が避難生活を送った。3日後の3月14日には4カ所に統合され、最終的に仮設住宅に全員が入居するまで、避難所は73日間運営された。 避難所生活で最も困難であったのはトイレの問題であった。これに対応するため、消防団が簡易防火水槽を設置し、汲み置きの水を利用してトイレを流せるようにした。 ■ むすび 地震や津波は、いつどこで発生するか分からない。万一被災した場合には、自分や家族を守ることを最優先としながらも、地域の一員としてどのように行動すべきかを考えることが求められる。 特に、避難の重要性を改めて認識し、津波警報が発令された際には最後まで警戒を怠らず、絶対に油断しないことが重要である。 最後に、講演者は中学生の聴衆に向けて「人生において、予期せぬ出来事や困難に直面することがあるかもしれない。しかし、どのような状況であっても『生きること』を第一に考え、未来へ向かって歩んでほしい」と述べ、講演を締めくくった。  
開催地より	津波災害について、体験談を聴講し、改めて「自分の命は自分で守る」が必要であると感じた。語り部の体験談を地域住民の方が聴講され、アンケート回収の中で「家庭での防災対策(非常持出品の準備、安否確認の連絡・共有等)」を実施したいとの声も多く、地域防災力向上へとつなげる当初の目的を一定程度達成することができたと考えている。今回の講義を今後の本市出前講座・防災訓練等の取組みに活用させていきたい。